

特 67
253

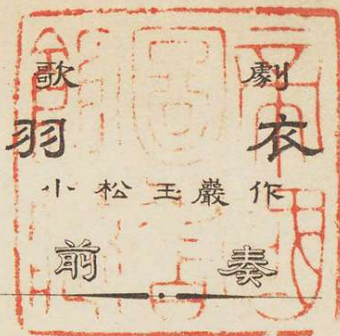


301
34



特67
253

1



Andante con moto.

Musical score for the first system, featuring five staves: FLUTE (フルート), I VIOLIN (第一ヴァイオリン), II VIOLIN (第二ヴァイオリン), VIOLA (ヴィオラ), and CELLO (チェロ). The tempo is marked *Andante con moto.* The key signature is one flat (B-flat). The first staff (Flute) has a dynamic marking *p* at the end. The other staves have dynamic markings *pp* and *mp* at the beginning and *p* at the end.

Musical score for the second system, featuring five staves: FLUTE (フルート), I VIOLIN (第一ヴァイオリン), II VIOLIN (第二ヴァイオリン), VIOLA (ヴィオラ), and CELLO (チェロ). The tempo is marked *Andante con moto.* The key signature is one flat (B-flat). The first staff (Flute) has a dynamic marking *f* at the end. The other staves have dynamic markings *mf* and *crese f* at the end.

小松耕輔
寄贈



dim p

p

mf

cresc f

第一合唱

Moderato (中庸の早き)

mf

f

第二 獨 唱

Andante (少し遅く)

伯良

p い と ま も な み の あ ま が わ ぎ *f* 今日 も つ り に と

い - そ - かん

dim. p *dolce*

p あ や し や な こ *f* く - に は な ふ り *p* お ん が く き こ え

れい こ - *f* よ - も に *p* み ち わ た る

f *p* *rit.*

Moderato (中庸の早さ)

第三合唱

f つねには なれぬ うみのさま 伯良 けーうのおもいーにて
みれば かなたの まつがーえに いろかも たへのころもあり

Andante

第四獨唱

伯良 *p* げにうつくしのころもやな— つねのきぬには
よもあ— らじ どりてかへりてわが いへの *p* たか

Andante con moto.

天女 *p* 喃 そのきぬは
らとなさん *rit* *dolce* *p dolce*

こ なた の よ な に い め さ れ そ う ろ ー ぞ *mf* は ひ ろ

mf

ひ た る こ ろ も な り *p* そ れ こ そ つ き の あ ま つ め

p

が み に き る あ ま の は ご ろ も よ ひ と の も つ べ き

も の な ら ず も と の こ と く に お き た ま へ *p*

p

伯良

mf ゼ も こ の き め の お ん め し は ー き て は て ん 女 に

ま し ま ー す か さ ら ば ま ー せ の き と く な

り こ ろ も を か ー へ す こ と あ ら ー *rit*

第五,合唱,獨唱,女聲二部,男聲二部.

Moderato.

mf も と よ り あ の こ こ ろ な く か へ す ま ど ば て な ち の か け ば

p い き は さ な ャ ら 天 マ 人 ャ ャ ャ *f* は ね な き と ば り の も こ じ と へ へ

天イ マにカヘラッ すンもン ナク ちえ またノ サニ めッ げア カイナシ り

天女
あまの - は - ら ふりさけ

Con espressi $\frac{3}{4}$ one

みれば か す み た - つ くも - じま どひて ゆくへ - しらずも

Andante con moto
〔女聲二部〕
p そらに い つしか ゆくく - も - の それさへ いまは うらやまし

dim

〔男聲二部〕
か - りょうびん がのなれ なれし あまじの はてぞ なつかしき

mf

Andante con moto.

〔伯良〕 *mf* みすがたをみたてまつればあまりにーもいたはーやささら

mf *f* *p*

〔天々〕 *moderato con animato* (愉快に) *mf* ばかりもをかへすべしなにころもをばたまふーと

f *poco animato*

(愉快に少し早く) 〔伯良〕 やさらはこなたへききかよびたるてんにーのぶが

くをこーこになしたまははばかりもをかへしもーすべし

cresc

Allegretto (少し早く)

〔天女〕

mf う れ ー や さ ら ば て ん じ ゅ う に か へ る を え ー た る

mf *f* *poco a poco animato*

よ ー ろ こ び の え れ よ ー か た み の つ ー き の ま ひ

Allegro (早く)

f た だ い ま こ こ に て そ ー つ ー つ よ の う き ひ と に

f

つ ー と ー べ ー ー *p* さ る に て も は ご ろ も な く て は

dim *p* *a tempo* (前の拍子にて)

a tempo

か の ま さ り と て は ま づ た び た ま へ 宿 見 *f* い や

dim

rit

f

と よ も こ の き め を か へ な ば ぶ き く は な さ で

そ の ま ま に 天 に や の ぼ り た ま ふ べ き 天 女 う た が ひ

dim

Andante Grave

は 人 間 に あ り て ん に い つ は り な き も の を

第七 合唱

Moderato

あらば かくし せよ さかばと さいし あまの は ろも あ たふ の ば ね
みよたぐひも なみの うへ みづきよ みが たふ ト の み ね
をり とらめ は きめ ら 着こ ころも つた ばい ニ は さい の ル きき なり すて
つきの みやを さな がら に うらいて み たる けしき かな

第八 獨唱

Moderato

mf きみがー よ は あまの は ろも まれにー
きーて なづとも つきぬ い は は か な

第九 合唱

Maderato.

はらへば みどり ひーげば あを まひの はそでは しらくーもや
をとめの もーすそ さながーら に はるのこ るものやへ がす み

第十女聲二部合唱

Allegro (早く)

(女聲二部)

f さ る は ど に と き う つ り あ ま の は

ご ろ も う ら か せ に た な ひ き た な び く

rit

Allegro poco a poco animato. (幾々早く)

(合唱)

f み ほ が き き き よ み が ー た あ ー だ か や ふ の み お

ま ひ の は そ て も は る が す み *f* か す か に な り て は て も な き

piano.

ff み そ ら に こ そ は き え に け れ

は し が き

ことし東京音楽學校の業を卒へたる、出羽の人小松耕輔氏、歌劇羽衣一篇を著して世に問はんとす。韻語と聲樂とを併せ好める小松氏は、詩と樂との調和をもて畢生の業とせんと志して、こは只試みにものしつるなりとぞ。もとより我が國には例なきことにしあれば、初めより全き効果を收め得んことを期すべきにはあらず。昔伊太利にて新音楽(NUOVA MUSICA)のなりいでけん時のさまなど偲ばれて、その山口のしるきを愛づる心ばせを、緇くひとに知らせばやと、一言を書き添ふるにこそ。

明治三十九年天長節

源 高 湛

例言

一篇は樂苑會第一回試演の料にとて、匆卒の間に筆を下し本年六月二日神田青年會館に於て演奏せしものなり。今回曲譜を出來得る丈簡略にし、一般學校、家庭等の要求にも應ぜん爲め、是を梓に附することゝなしぬ。

一材は謠曲「羽衣」にとり、篇中の事實は一も改竄する處なし、文字の如きも主として是にとれり、但し舞臺上の効果、及び音樂との調和につきては、聊か工夫する處あり、去れど歌劇と云はんは、なほ餘りにうしろめたし、作者は唯他日に其大成を期せんのみ。

一前奏は絃四部と管樂器とを要する故に、若し此の設備を成すこと能はざるときは是を除き、直ちに第一の合唱より始めて可なり。

一篇中の合唱、四部全體を歌ふこと能はざるときは、最高音部のみ歌ふも妨なし。

一篇は舞臺上の演技を目的とすれども唯音樂をのみ演奏するも興味あるべし。此の場合に於ては全體の合唱體は後方に、立歌手たるべき天女、伯良は前方に齊立し、ビヤノ又はオルガンの伴奏につれて演奏す。又合唱獨唱を扶けん爲めにヴァイオリン等を用ゐて各部を助奏するは最もよろしかるべし。

一舞臺上の型は必しも一定するに及ばず。各自の思考、意匠によりて隨意是を定めて可なり。

一學校、家庭等に純潔高尚なる藝術の趣味を容れむとするには本篇亦多少の効果あるべきを信ずれば、作者はなるべく多く此の方面の採用をも望むものなり。

序

われの如く才^{さい}つたなきもの、藝術にたつさはりて、よく何をかなし得むや。唯衷情一片のやみがたきものありて、自ら畫く愚しき幻の、せめては影をだに髣髴せしむることもやとて。

樂苑の巨匠、林の如く駢べる中を、われは額^{ぬか}にはじらひの汗を印^{いん}して、榮^{さかえ}ある藝術の曠野をば辿らむとするなり。つたなき才と到らざる技^{わざ}の、かくも幼なきを告白し、猶ほゆくべき路の迢に遠きを思ひて、竊に此の作を梓に附しぬ。

明治三十九年十一月三日

玉

巖

劇歌
羽衣

小松玉巖作

舞臺、幕が垂れたるまま、前奏の音樂恰も遠潮のよすごとく、洋々として聴えきたる。此の前奏終らむとする頃より徐ろに幕あく。

一面の平舞臺、上手によせて松樹の老木生ひ茂り、下手遙に海をへだてて富士の遠山を望み、此處凡て三保の松原海岸の曉景、かたへの松には天女の脱きかけし天の羽衣あり。漁夫伯良茫然と此の景色に見恍れて佇立す、凡て活人畫模様。やがて幕明きたるまま樂座の合唱となる。

樂座合唱

ほのぼのと明けゆけば、
とほじろ
遠白く月落ちて、

三保が崎、清見瀉、
浪より覺むる松原や。

春なれば満つ潮の、
海の香も霞より、
もれ出るこちして、
朝風しぬる海の面。

伯良獨唱

「暇もなみの海士が業、
あま
今日も釣にと急がむ。」

と歌ひつゝ舞臺正面に來る。

伯良獨唱

「あやしやな。
こくう
虚空に花ふり、音樂聞え、
れいきやうよも
靈香四方にみちわたる。」

不思議の思入れあり。直ちに樂座の合唱となる。

樂座合唱

つねにはなれぬ海のまま、
伯良稀有の思にて、

目次

一幕一場

前奏	奏		一
第一合唱	樂座		二
第二獨唱	伯良		三
第三合唱	樂座		四
第四獨唱	伯良		四
第五合唱	天女		六
獨唱	天女		七
女聲二部	樂座		七
男聲二部	樂座		七

第六獨唱	伯良		八
------	----	-------	---

第七合唱	天女		一一
------	----	-------	----

第八獨唱	天女		一一
------	----	-------	----

第九合唱	樂座		一一
------	----	-------	----

第十女聲二部	樂座		一二
--------	----	-------	----

合唱	樂座		一二
----	----	-------	----

登場人物

天女 最高音部

漁夫伯良 高音部

處 三保の松原

時 春 曉

天に還らんすべもなく、
地に、また 住まば、下界なり。

とかく衣を返さねば、

力およばず、せんかたも、

涙の露の玉鬘たまかつら

かざしの華もしほしほと、

今、まのあたり天人の、

五衰のさまぞあさましき。

天女悵然としてなげく。去れど悲んで攫らざるの態あるべし。
直ちに哀なる節にて朗詠體の獨唱となる。

天女の歌

「天の原ふりさけ見れば霞たつ

雲路まどひてゆくへ知らずも

樂座女聲二部

空にいつしか行く雲の、

其れさへ、今は、うらやまし、

樂座男聲二部

迦陵頻伽のなれなれし、

天路のはてぞなつかしき。

此の間天女いともうち困うじたるさまなり。伯良つくく是を見、憐憫の情に堪えず。獨唱となる。

伯良獨唱

「み姿を見奉れば、

あまりにも、痛はしや、

さらば衣を返すべし。

天女にはかに勢つきたる調子にて。

天女獨唱

「なに衣をばたまふとや、

さらば、こなたへ。

伯良獨唱

「聞きおよびたる、天人の

舞樂を、此處に、なしたまはば

衣を返し申すべし

見れば彼方かなたの松が枝に、
色香も妙たえの衣ころもあり。

此の合唱を了るまでに伯良松樹に近く寄り、獨唱となる

伯良獨唱

「げに美しくしの衣きぬよな、
常の衣きぬにはよもあらじ、
取りて、歸りて、我家の、
寶となさむ。

羽衣を松が枝えより取りてめづらかに打眺む。時に松の木陰、
砂山のほとりより天女白衣に華鬘してしづくと出て來り
是を見て驚きたるさまなり。

天女獨唱

「喃、其の衣きぬはこなたのよ、
なにしに召され候ぞ。

伯良もうち驚ろきて天女を見る。

伯良獨唱

「こは拾ひたる衣ころもなり。

天女あまよき處にて。
天女獨唱

「それこそ、月の天あまつ女めが、
身みに着る天あまの羽衣はねよ、
人間ひとのもつべきものならず、
もとの如くに置き給へ。

伯良獨唱

「そも、此の衣きぬの御主おんぬしは、
さては、天女にましますか、
さらば末世まつせの奇特きどくなり、
衣ころもを返すことあらじ。

直ちに樂座の合唱となる。天女、伯良、此の合唱につれて科あ
り。

樂座合唱

もとより海士あまの心なく、
返すまじとて立ちのけば、
今は、宛ら、天人てんにんも、
羽はねなき鳥の如くにて、

水清見潟、富士の峯、
月の都をさながらに、
寫して見たる景色かな。

天女の舞、一段と靜になり、やがて朗詠體の獨唱となり、續きて樂座の合唱となる。

天女の歌

「君が代は天の羽衣まれに着て
撫づとも盡きぬ巖かな。」

樂座合唱

拂へば緑、引けば青、
舞の羽袖は白雲や、
少女の裳裾、をとめさながらに、
春の衣の八重霞。はるのも

此の所より曲調一變し、遽に急となり、舞の手亦一段に快活となる。

樂座女聲二部

さるほどに時移り、

天の羽衣、浦風に、
たなびき、たなびく。

樂座合唱

三保が崎、清見潟、
脚高や、富士の峯、
舞の羽袖も春霞、
かすかになりて、はて涯もなき
みそらにこそは消えにけれ。

此の所にて舞納まり、音樂の附曲を残して天女、舞の手其儘昇天の形となり遙に天を望んで羽衣を翫す。伯良此の様に茫然として天女の美に見惚る、此處暫く活人壽模樣にて、幕。

(完)

天女獨唱

「嬉しや、さらば天上にてんじやう

歸るを得たる、喜の

それよ、かたみの、月界つきの舞、

只今、此處にて奏しつゝ

世のうき人に傳ふべし。

さるにても、

羽衣なくては叶ふまじ、

さりとては、先づたび給へ。

伯良獨唱

「いやとよ。

若し、此の衣を返しなば、

舞曲はなさて其儘に、

天てんにや、上り給ふべき。

伯良なほも天女の昇天を掛念して羽衣を返さず、天女さと、面を正し、莊重なる調子にて。

天女獨唱

「疑は人間にんげんにあり、

天てんに偽りなきものを。

直ちに樂座の合唱となる。此の時舞臺にての科しよさは凡て合唱と相俟つ、而して「霓裳羽衣の曲をなす」より天女の舞となる、舞の手も亦凡て合唱と相俟つ。

樂座合唱

あらはづかしや、さらばとて、

天あまの羽衣與ふれば、

少女をとめは衣きぬを着ちやくしつゝ、

霓裳羽衣けいさうういの曲きよくをなす。

天あまの羽衣、風くわに和し、

雨そらにうるほふ花の袖、

天そらにはあらで、此處もまた、

げにも妙たえなる舞の袖。

見よや比たぐひも波の上、

